

第7章 逸脱行動とセルフイメージ・対社会的自己認識および社会観・生活価値観

第1節 セルフイメージ・対社会的自己認識と逸脱行動の関係

青少年は、自分自身をどのように感じたり考えたりしているのだろうか。それを明らかにするために、本調査研究においては、14項目の質問をした。この調査結果の概略については、すでに第3章第1節で説明しているのので、ここでは、逸脱度との間にどのような関係があるかに焦点を絞り、表7-1に示された調査結果に従って見てみることにしたい。

表7-1 逸脱行動とセルフイメージ・対社会的自己認識の関係（平均の比較）

		非逸脱群 (A)	逸脱小群	逸脱中群	逸脱大群 (B)	4群の 平均値	有意差	非逸脱群 (A)－逸脱 大群(B)
1	私は能力には自信があるほうだ	2.21	2.31	2.27	2.36	2.27	*	-0.15
2	私は人よりすぐれているところがある	2.40	2.51	2.50	2.60	2.48	**	-0.20
3	他人からどう思われているか、気になる	3.23	3.27	3.27	3.14	3.24		0.09
4	何か人から注目されることをしてみたい	2.60	2.83	2.90	3.09	2.78	**	-0.49
5	毎日の生活は充実している	2.78	2.62	2.51	2.46	2.65	**	0.32
6	努力をすれば成果はえられると思う	3.38	3.36	3.27	3.26	3.34		0.12
7	私は将来に希望をもっている	3.05	2.99	2.85	2.84	2.98	**	0.20
8	私にはこれまでに打ち込んできたことがある	3.08	3.06	3.05	2.87	3.04	*	0.21
9	その場のふいんきに流されて、自分を見失うようなことはない	2.71	2.55	2.45	2.40	2.58	**	0.31
10	私はがまんづよいほうだ	2.84	2.72	2.65	2.50	2.73	**	0.34
11	人からどう思われようと自分の考えを大切にしたい	3.01	3.00	2.95	3.05	3.00		-0.05
12	私は人の役にたつ人間になりたいと思う	3.26	3.13	3.02	2.99	3.15	**	0.27
13	私は意志が強いほうだ	2.66	2.59	2.60	2.66	2.63		0.00
14	自分の性格がいやになることがある	3.02	3.04	3.10	3.10	3.05		-0.08

* 有意水準5%

** 有意水準1%

表7-1は、回答結果を「とてもそう思う」を4点、「ややそう思う」を3点、「あまりそうは思わない」を2点、「全くそうは思わない」を1点として、それぞれの逸脱度群に平均値を計算したものである。第3章と同様に、ここでも14の質問項目を「セルフイメージ」と「対社会的自己認識」に分けて検討してみよう。

「セルフイメージ」に関する質問項目（表中1・2・5・6・7・8・10・13・14）に関して、非逸脱群と逸脱大群の平均値の差が最も大きい項目は、「私はがまんづよいほうだ」（平均の差 0.34）という項目であり、非逸脱群に比べて逸脱大群には、自分を「がまんづよい」と考えている者がかなり少ない。現在、すぐ「キレル」青少年が問題になっているが、逸脱度の大きい高校生の中には、欲求不満に対する耐性が乏しい者が多いことが明らかとなった。

その次に平均値の差が大きかったのは、生活の充実感に関する「毎日の生活は充実している」（平均の差 0.32）であり、次いで「私はこれまで打ち込んできたことがある」（平均の差 0.21）、「将来に希望をもっている」（平均の差 0.20）、「私は人よりすぐれているところがある」（平均の差 0.20）、「私は能力には自信があるほうだ」（平均の差 0.15）となっている。逸脱大群は非逸脱群に比較して日常生活の充実感が乏しく、「打ち込んできたものがある」という者も少なく、将来の展望も明るいと思っていない者が多い。しかし、意外であったのは、非逸脱群よりも逸脱大群の方が、「私は人よりすぐれているところがある」「私は能力には自信があるほうだ」と回答している者の比率が高い点であった。

「対社会的自己認識」（表中3・4・9・11・12）に関しては、非逸脱群と逸脱大群の平均値の差の最も大きい項目は、「何か人から注目されることをしてみたい」（平均の差 0.49）という項目である。非逸脱群に比較して逸脱大群が「人から注目されたい」という意識を強く持っていることは注目に値する。

非逸脱群と逸脱大群との間で次に差の大きい項目は、「その場のふいんきに流されて自分を見失うようなことはない」（平均の差 0.31）という項目である。逸脱度の大きな青少年の中には、自分で自分を律していくことに不安をもつ者が多いように見える。「私は人の役に立つ人間になりたいと思う」（平均の差 0.27）という意識にも、逸脱度による差がみられた。また、逸脱度が高い者ほど、「人の役に立ちたい」という気持ちが欠如している。これは、いわゆる「ジコチュウ」と言われるように、逸脱がすすむにしたがって、次第に自己中心的になっていくことのあらわれであろうか。

逸脱大群は非逸脱群に比較して、以下のことが言えるように思われる。逸脱大群には、いわば「目立ちたがり屋」が多い。彼らは、自分では人より優れているところがあると思っていたり、能力に自信がある者も比較的多く見られるが、ものごとに打ち込む経験を持ったことは少なく、自分自身で「我慢強くない」また「周囲に流れやすい」と感じている。将来に希望をあまり感じていない者が多く、人の役に立つ人間になりたいと考えている者も相対的に少ないといえる。

第2節 社会観・生活価値観と逸脱行動との関係

高校生たちは、自分自身の生き方に関してどのように感じ、また、社会や世の中をどの

ように捉えて生活をしているのだろうか。本調査においては、この点に関して、11の質問項目を設けて明らかにしようとした。すでに第3章第1節において、調査結果の概略については述べているので、本節では、前節と同様の分析視角と方法を用いて、社会観・生活価値観と逸脱行動との間にはどのような関係があるかに焦点を絞って述べることにする。

表7-2 逸脱行動と社会観・生活価値観との関係（平均の比較）

		非逸脱群 (A)	逸脱小群	逸脱中群	逸脱大群 (B)	4群の平均値	有意差	非逸脱群(A) - 逸脱大群(B)の差
1	自分がよくても人に迷惑をかけるようなことはすべきではない	3.68	3.52	3.38	3.25	3.53	**	0.44
2	将来のために現在の楽しみをがまんするのは、ばかげている	2.50	2.70	2.78	3.01	2.67	**	-0.51
3	人が成功するかどうかは運がいいかどうかにかかっている	2.34	2.39	2.52	2.59	2.41	**	-0.25
4	おとなの言うことはあまり信用できない	2.56	2.72	2.92	3.02	2.72	**	-0.46
5	今の世の中には不満に思うことが多い	3.19	3.26	3.39	3.41	3.27	**	-0.22
6	悪いことをすれば、きっとバチがあたると思う	3.28	3.12	2.95	2.83	3.12	**	0.46
7	今の社会は強い者が弱い者を押さえつける社会だ	2.90	2.93	2.99	3.05	2.95		-0.15
8	学校の規則やきまりを守ることは大切だ	3.02	2.69	2.49	2.12	2.73	**	0.90
9	世の中は、お金だけがたよりだ	2.29	2.41	2.50	2.60	2.40	**	-0.31
10	世間の人々の目はきびしい	3.07	3.04	2.98	3.03	3.04		0.04
11	生活をしていく上で、法律を守ることは大切だ	3.36	3.19	2.99	2.77	3.18	**	0.59

* 有意水準5%

** 有意水準1%

第3章での分析と同様に、本章でも表7-2の調査結果に従い、11の質問項目を「社会規範遵守意識」（規範・法律を遵守しようという意識と悪いことをした場合の社会からのサンクションをどう考えているか）、「生活価値観」（将来のために現在の楽しみを我慢する生き方への賛否、お金だけがたよりだと思うか、成功は運次第だと思っているかどうかについての意識）、「社会やおとなへの不満・不信」の3つに分けて検討してみよう。

社会規範遵守意識に関する質問項目では、非逸脱群と逸脱大群の平均値の差が最も大きい項目は、「学校の規則や決まりを守ることは大切だ」という項目で、差が0.9もあった。非逸脱群には学校の規則を守ることは大切だと考える者が多いのに対して、逸脱大群には、学校の規則やきまりを守ることを軽視する者が多い。

非逸脱群と逸脱大群の差が次に大きい項目を順に並べると、「生活して行く上で法律を守ることは大切だ」（平均の差0.59）、「悪いことをすればきっとバチがあたると思う」（平均の差0.46）「自分がよくても人に迷惑をかけるようなことをするべきではない」（平均の差0.44）の順となっている。学校の規則の遵守意識に比較すると、一般的な法律を遵守しようという意識は全体に高い（4群の平均3.18）と言えるが、ここでもやはり逸脱度が高い者ほど法律の遵守意識は低い。また、仏教的因果応報観ないし日本人的な賞罰観ともいえる「悪いことをすればきっとバチがあたると思う」という考え方は、全体的には多くの高校生に受け入れられているが、（4群の平均3.12）、逸脱度が高い者ほど受け入れていない傾向が見られる。「自分がよくても人に迷惑をかけるようなことをするべきではない」という行動規範は、全体的には多くの青少年が共有しているといえるが（4群の平均3.53）、非逸脱群に比較して逸脱大群は、やはりこういった行動規範についても、肯定する者の比率が低い。

次に、生活価値観に関する質問項目で、非逸脱群と逸脱大群の差の最も大きい項目は、「将来のために現在の楽しみをがまんするのはばかげている」という項目で、0.51の平均値の差があった。逸脱大群は、現在の楽しみを優先する現実享乐的な傾向が強い。

平均の差が次に大きいのは、「世の中はお金だけがたよりだ」（平均の差0.31）であり、さらに「人が成功するかどうかは運がいいかどうかにかかっている」（平均の差0.25）の順となっている。逸脱度が大きい者ほど、世の中はお金だけがたよりで、人生は運次第といった金銭本位的で運命論的な生活観をもつ傾向があることがわかる。

社会やおとなへの不満・不信に関する項目に関して、非逸脱群と逸脱大群の平均値の差が最も大きい項目は、「おとなのいうことは信用できない」という項目で、0.46の平均値の差がある。つまり、逸脱大群には大人への不信感をもつ者が多い。次いで平均値の差が大きいのは「今の世の中不満に思うことが多い」（平均の差0.22）、さらに「今の社会は強いものが弱いものを押さえつける社会だ」（平均の差0.15）の順となっている。逸脱度が大きい群ほど、社会あるいは社会のあり方やおとなに対する不満感や不信感が強いといえる。

以上、高校生の社会観・生活価値観は、逸脱度の違いによってかなり異なった面が見られることが明らかとなった。逸脱度が大きい者ほど、法律やきまりなどの規範を遵守する意識、とくに学校の規則やきまりを守ることを軽視する意識が強く、現実享乐的、金銭本位的、運命論的な生活観を持つ者が多い。また、社会やおとなに対して不満感や不信感を抱いている者が多い。

第3節 まとめ

本章では、青少年のセルフイメージ、対社会的自己認識、社会観や生活価値観が逸脱行動とどのような関係にあるのかを明らかにしようとした。その結果、次のような点が明らかとなった。

結論的に言えば、青少年の逸脱行動は、社会やおとなとの相互作用のなかで形成される自分自身に対するイメージとしてのセルフイメージ、社会観や生活価値観のあり方と密接な関連をもっているということである。表現の仕方を変えれば、逸脱行動とそうしたセルフイメージや社会観・生活価値観とは、表裏一体若しくはセットになっているといえる。もっともそこには、青少年のセルフイメージや社会観・生活価値観などの一定の意識が形成されることによって逸脱行動がなされる側面と、逆に、逸脱行動がなされた結果、セルフイメージや一定の意識が形成される側面の両面があるとは言える。

具体的には、セルフイメージのあり方や社会観・生活価値観についての逸脱行動群別の分析から、逸脱度の違いによって、セルフイメージや社会観・生活価値観にかなりはつきりとした違いがあることが明らかとなった。

非逸脱的な青少年に比較して、逸脱度の高い青少年は、これまで打ち込んできたことがない者が多く、生活充実感が乏しく、将来に希望をもっている者も少ない。にもかかわらず、彼らの中には人より優れていると思っていたり、能力に自信がある者が相対的に多く、そのためでもあろうか、何か人から注目されることをしてみたいという欲求を拡大させている者も多い。ところが、一方で、逸脱度の高い青少年たちは、あまり「人の役に立ちたい」とは考えない傾向をもっており、その場その場の雰囲気の流れに流され自分を見失ってしまうような傾向、つまり自己統制力を欠いている者が多いといえる。

さらに、社会観や生活価値観に関しても、逸脱度の高い青少年は、社会的な規範を遵守する意識が乏しく、運命論的、現実享乐的、金銭本位的な生活価値観をもっており、社会やおとなに対する不満感や不信感が強い。従って彼らの行動は、必然的に社会に対して価値を付加する方向ではなく、価値剥奪的、反社会的な方向へと向かうことになるのだと考えられる。

